

ギリシア思想史における *mētis*（狡知・策略）の位置 —プラトン『饗宴』におけるエロース誕生神話を手掛かりに—

The Position of '*mētis*' in Ancient Greek Thought: A Consideration of the Genealogical Myth of Erōs in Plato's *Symposium*

梶村 哲矢
KAJIMURA, Tetsuya

摘要

This paper reconsiders the significance of *mētis* (cunning intelligence) in ancient Greek thought. In Homer *mētis* was an important concept that involved, among others, the essential quality of the hero Odysseus, but from the sixth century BCE onwards it became less conspicuous in texts. The monumental book of 1974 by M. Detienne and J.-P. Vernant on this theme held that Plato's emphasis on contemplative knowledge coincided with that stream, and criticised Plato's exclusion of *mētis* from his philosophy. Indeed, since *mētis* is a sort of skill of occasional handling, there seems to be no room for it to be valued in Plato's philosophy, where the purity of knowledge is given importance. Moreover, *mētis*, the knowledge frequently linked with 'deception' or 'trickery', could easily be dismissed from the moral point of view in Plato's thought. In fact, however, despite the criticism by Detienne and Vernant, *mētis* plays a significant role in Plato's thought. In the myth told by Diotīma in the *Symposium* on the genealogy of Erōs, the goddess Mētis is nominated as his grandmother. There Erōs who inherits *mētis* from his grandmother via his father Poros on the one hand and 'precept of lack' from his mother Penia on the other is considered as a dexterous and insatiate hunter of the 'true knowledge', the very beauty. Thus, Plato ingeniously incorporated *mētis* into the intellectual practice of *philosophia*, love of knowledge. This paper concludes that in Platonic philosophy *mētis* is given a significant role of an adroit guide in the pursuit itself of true *sophia*.

キーワード：メーティス 狡知 ソピアー プラトン『饗宴』 オデュッセウス

Keywords: *mētis*, Cunning Intelligence, *sophia*, Plato's *Symposium*, Odysseus

1. はじめに

μητις (*mētis*: 狡知・策略) は「知」⁽¹⁾を表すギリシア語の一つであり、すでに前8世紀のホ

メロスにおいてその用例が多数存在する⁽²⁾。ホメロスにおける $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ は、ゼウス、アテナなどの神々やオデュッセウスをはじめとする主要な英雄たちに対して使用されており、古代ギリシアでの「知」を考察するにあたって重要な概念となっている。

しかし、LSJ⁹ 希英辞典(第9版)で $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ の項目を参照しても、現在では一般化している *cunning* という訳語は見当たらない。LS¹ (初版)では $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ の語に *cunning* の訳語もあてられていたところ、LSJ⁹では *cunning* が削除されているのである。LSJ⁹では、 $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ の語に対して二つの項目を立てており、一つ目には *wisdom*、*skill*、*craft* とあり、二つ目には *counsel*、*plan*、*undertaking* という訳語があてられているだけである。このように LSJ⁹では、 $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ の言葉に対して現在では一般化している訳語とは幾分異なる意味を付しているのである⁽³⁾。

こうした状況にあって、1974年に M. Detienne と J. -P. Vernant の二人は「近代の研究者たちは $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ の重要性を無視してきた」⁽⁴⁾という問題意識のもと *Les Ruses de l'Intelligence: La mêtis des Grecs* を著している。彼らは $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ を *cunning intelligence* (英訳版)と捉えており、こうした知もまた古代ギリシアでの「知」の一つであるのにも関わらず、プラトンをはじめとした哲学者たちによって「真の知」から排除されてきたという認識を示している⁽⁵⁾。そして、 $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ を古代ギリシアの思想史上に正しく位置付けようと、様々な古典テキストを渉猟し $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ の実像をあぶり出すことを試みている。

この著作は、古典学の歴史の中で初めて本格的に $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ を正面から論じ、その価値を正しく評価したものであるとして広く受け入れられてきた。代表的なものに、『イリアス』での英雄性を $\beta\acute{\iota}\eta$ (威力) と $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ の観点から論じている Nagy (1979)の著作などが挙げられる。

しかしその一方で、Kofman (1988)、Naas (2008)、Helmer (2012)、Silva (2020)などのように、Detienne & Vernant が $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ に対する不当な評価の原因を、プラトンによる $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ 断罪に求めたことに反論している例もある。Detienne & Vernant によれば、 $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ とは多様に変化していく現実に対応するための「知」である。それ故、 $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ は本質的に柔軟かつ曖昧なものであり、不変の性質を持たない実践的な「知」である。この点が、プラトンの重視する観想的な「知」、すなわち哲学的「エピステーメー」と性質を異にするために排除されてきたと Detienne & Vernant は結論付けている⁽⁶⁾。

これに対して Kofman (1988)は、プラトン哲学は $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ を排除しているのではなく、むしろその内部に取り込んでいると主張している⁽⁷⁾。彼女はこの点を論じるために『饗宴』でのエロース誕生神話に言及しており、エロースがその誕生の時から $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ と深く関係していることを指摘している。

本稿では、こうした Kofman などのプラトン哲学と $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ との深い関係性を指摘する研究も踏まえて、「真の知 (σοφία)」への愛としての哲学と $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ との関わりを検討し、最後に $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ と σοφία との関係性を論じる。第4節以降で詳述するが、本稿は $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ を「真の知」としての σοφία の一要素として捉えている。プラトン哲学において、 $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ は σοφία の一要素として重要な役割

を果たしているのである。

2. プラトン以前に見られる *μητις*

2. 1. ヘシオドス『神統記』におけるメーティス女神

μητις が登場する最古のテキストは、先述の通りホメロスによる『イリアス』、『オデュッセイア』である。ホメロスの作品にあっては、*μητις* はもっぱら「知」の一種として描かれているが、少し後のヘシオドス『神統記』では「女神」ともされており、それにまつわる次のような神話も記述されている。それは次の通りである：「神々の王となったゼウスは、メティス (*Μητις*) を最初の妻とした。神界と人間界とを問わず、最も知識の深い方 (*πλεῖστα εἰδυῖαν*) だ。だが、彼女が梟の目の女神アテネを生もうとする時、ゼウスは彼女の心を企みで欺き、甘言をもって言いくるめて、己の腹中に嚥みこんだ。」(*Theog.* 886-90) ⁽⁸⁾。

ゼウスがメーティス女神を飲み込んだ理由は、この女神から生まれることになっている「賢い」子供がゼウス自身の王権を脅かすことになるであろうと、ガイアとウラノスから警告されたためである。ゼウスはメーティス女神を飲み込んだ結果、この女神の「知恵」を自らのものとし、後にアテナ女神を自身の「頭」から産むこととなる。

ヘシオドスよりも前に以上のような神話が存在していたかどうかは定かではないが、いずれにせよヘシオドスの描く神話の世界では、*μητις* を擬神化したメーティス女神はゼウスをも凌ぐ知恵を持つ女神とされている。そして、その知恵とは続く 900 行にあるようにゼウスに「善きことも、悪しきことも (*ἀγαθόν τε κακόν τε.*)」助言するような知恵なのである。次に論じるホメロスでの *μητις* と同様、ヘシオドスにあっては *μητις* 的な「知」は、後に確立される「善」といった倫理・道徳的規範とは必ずしも合致するものではなかったと言ってよいであろう。

2. 2. ホメロスにおける *μητις*

先述した Detienne & Vernant によれば、*μητις* とは多様に変化する世界の中で難局を切り抜ける際に発現する知的能力であった⁽⁹⁾。現実の世界が多様に変化するからこそ、*μητις* 自体もそれに合わせ多様な能力を「柔軟に」発揮するのである。このことはホメロスで、*πολύμητις* (*μητις* に長けた) などがオデュッセウスのエピセツトとして多用されていることから察することができる。

実際に『オデュッセイア』第 13 巻では、アテナ女神がオデュッセウスに対して次のように話しかける場面がある。(日本語訳は筆者による、希語原文掲載のものは以下同じ。)

σχέτλιε, ποικιλομήτα, δόλων ἄτ', | [...] | ἀλλ' ἄγε, μηκέτι ταῦτα λεγώμεθα, εἰδότες ἄμφω | κέρδε',
ἐπεὶ σὺ μέν ἐσσι βροτῶν ὄχ' ἄριστος ἀπάντων | βουλῇ καὶ μύθοισιν, ἐγὼ δ' ἐν πᾶσι θεοῖσι | μήτι τε
κλέομαι καὶ κέρδεσιν' (*Od.* 13. 293-99)

頑なな男よ、様々に $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ を巡らせ、欺瞞に飽くことを知らぬ者よ。…（中略）…だが、悪巧みを心得ている者同士、これ以上そうした言い合いはやめようではないか。あなたはあらゆる人間たちの中でも策略と弁舌にかけてははずば抜けている、そして私もあらゆる神々の中で $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ と悪巧みにかけては称賛されているのだからね。

アテナ女神はオデュッセウスの「知」を以上のように評している。アテナのこうした発言は、オデュッセウスの策略に富んだ「知」を非難するのではなく、むしろ女神であるアテナがオデュッセウスと知恵比べをしているようにも解釈できる。

Detienne & Vernant が、ホメロスにおいて $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ の特徴が最もよく描写されている箇所として挙げているのが『イリアス』第 23 巻での戦車競技の場面である。この戦車競技ではエウメロス、ディオメデス、メネラオス、アンティロコス、メリオネスの 5 名（参戦順）が選手として参加しているが、このうちのアンティロコスが最も若輩で経験が浅く、かつ最も脚の遅い馬を駆るという設定になっており、本来であればアンティロコスの最下位は決定的なものと予想される。

このような状況で、アンティロコスの父ネストルは息子に以下のような助言をして、 $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ を発揮すれば馬が劣っていても有利に戦えると伝える。

ἀλλ' ἄγε δὴ σύ, φίλος, $\mu\eta\tau\iota\nu$ ἐμβάλλεο θυμῷ | παντοίην, ἵνα μή σε παρεκπροφύγησιν ἄεθλα. | $\mu\eta\tau\iota$ τοι δρυτόμος μέγ' ἀμείνων ἢ ἐ βίηφι· | $\mu\eta\tau\iota$ δ' αὖτε κυβερνήτης ἐνὶ οἴνοπι πόντῳ | νῆα θοὴν ἰθύνει ἐρεχθομένην ἀνέμοισι· | $\mu\eta\tau\iota$ δ' ἠνίοχος περιγίγνεται ἠνιόχοιο. (Il. 23. 313-18)

そこで、愛しい息子よ、お前はあらゆる $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ を心に留め、賞品がお前のもとから逃げ去ることのないようにするのだぞ。実際に、木こりは力でよりも $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ によって遥かに良い仕事をするし、さらに舵取りが葡萄酒色の海で、風に揺さぶられる快速の船をまっすぐに操るのも $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ によってであり、そして戦車乗りが他の戦車乗りを凌ぐのも $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ によってなのだ。

アンティロコスは父の助言通り、競技中競り合うこととなったメネラオスに対して危険な勝負を「戦略的に」仕掛ける。アンティロコスは、通常勝負を仕掛けるべきではないと見なされている、戦車一台しか通過できないような隘路でメネラオスを追い抜いた。まずは、ここにアンティロコスによる $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ の発現を見出すことができる。

最終的に戦車競技の結果は、一着ディオメデス、二着アンティロコス、三着メネラオスという順になる。ただし、一着のディオメデスはアテナ女神の力添えによって例外的に優勝しているので、この場合アンティロコスが実質的に一番速かったと言えよう。しかし、メネラオスはアンティロコスが $\delta\acute{o}\lambda o\varsigma$ （騙し）を用いて自分を妨害したのだと言って、競技の結果に異議を申し立てる。確かに、ルールに反していないとはいえメネラオスの言う通り、本来であれば勝負を仕掛けるべきではない隘路で追い抜いたことは、公正さに欠けると糾弾されても仕方がない。

ここに、*μητις* が含み得る道德上の問題性を指摘することができる。

メネラオスからの抗議を受けたアンティロコス、まったく反論することなく「私は年も若く、まだ *μητις* も十分ではない (*λεπτή δέ τε μητις*)」(II. 23. 586-90) と認めて謝罪する。この謝罪を受けてメネラオスはアンティロコスを許し、二着の褒賞も彼に譲った。アンティロコスのこのような「柔軟」な態度にもまた *μητις* の発現を見出すことができるであろう。ここでは、アンティロコスが見事にメネラオス王を懐柔したとも解釈できるからである。このように、ホメロスにあって *μητις* は必ずしも否定的に描かれているわけではない。また、その後の時代のピンドロスにも同様な傾向が見られる⁽¹⁰⁾。

しかし、前 6 世紀以降になると *μητις* に対する否定的な見方も現れるようになる。本節で概観してきたヘシオドス、ホメロスが描くような神々に関しては、「狡知」の面も含め道德的に見て正しい振る舞いをしていないという批判もなされるようになってきた。早いものでは前 6 世紀に活動したクセノパネスによる非難が残っており⁽¹¹⁾、Detienne & Vernant が批判的に取り上げたプラトンの詩人に対する態度も一般的にはこの文脈に位置付けられている。

プラトンは『国家』第 2 巻で詩人を批判して次のように述べている：「私は言った、『神々が神々と戦争したり、策略をめぐらし合ったり、闘い合ったりするような物語も、けっしてしてはならない—そもそもそれは、真実のことではないのだから—』」(Resp. 378B-C)⁽¹²⁾。

プラトンは、将来国家の守護者となる者たちに対する教育方針の中で、詩人たちが描いた物語を批判している。確かに、プラトンは道德の面から「策略」などの「徳」に反するような性質の知力を評価していなかったと言えるであろう。しかし、プラトンがホメロス以来受け継がれてきた *μητις* 的な「知」を完全に排除してしまったかという点、必ずしもそうではない。次節以降ではこの点を検討してみたい。

3. プラトン『饗宴』でのエロース誕生神話

これまで論じてきたように、*μητις* はホメロスにあっては実践的な種類の「知」を表す重要な概念であり、英雄の資質の一つであった。しかし、ホメロスでそれほど重要な概念であった *μητις* は、その後使用頻度が低下していく⁽¹³⁾。前 7 世紀以降の古代ギリシア世界では、この言葉への注目が明らかに弱まっていったが、*μητις* に見逃しがたい重要な地位を与えているのがプラトンであることを本稿では指摘したい。

確かに、プラトン対話篇全体を通して *μητις* あるいはその派生語は 2 回しか使用されていない。そして、その 2 回の使用例はともに『饗宴』の中にある。プラトン哲学における *μητις* は見逃されがちであるが、以下で論じる『饗宴』でのエロース誕生神話を考えてみれば、それは間違いであることに気付く。エロース誕生神話からは、プラトンにとって愛知の営みである哲学が *μητις* と深く関わっていることが理解できるのである。

その議論を通して、本稿では $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ を「真の知」から退けたのはプラトンであるという Detienne & Vernant の主張に反論を試みたい。プラトンが $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ をその反道徳性や知識としての純粋性に問題があるとして、哲学的真理の領域から退けたという彼らの主張は一見するととってもらしい。しかし、『饗宴』でのエロース誕生神話を手掛かりとすることで、プラトンの $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ に対する態度の異なった面が見えてくる。

Detienne & Vernant に対するプラトン哲学の観点からの反論は、すでに紹介したように Kofman (1988) らによって提出されている。Kofman は、プラトンが確かに観想的な「知」と技術的な「知」を分けているという点は否定できないが、真意はそれほど単純ではないと主張している⁽¹⁴⁾。彼女はこうした反駁を試みるために、『饗宴』でのエロース誕生神話に着目した。Helmer (2012) も指摘するように⁽¹⁵⁾、Detienne & Vernant は、『饗宴』でのメーティス女神とエロースとの関係性について、エロースを単なる狩人やソフィストとしてしか扱っておらず、プラトンによるその哲学的な側面の描写を無視しているのである。

とりわけ Kofman のものは『饗宴』でのエロース誕生神話に焦点を当てて、プラトン哲学と $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ との関係性を論じている。彼女はその神話でのエロースの祖先に着目し、メーティス女神から彼の父ポロスへとその豊富な「知」が受け継がれつつも、母ペニアという「アポリア」の要素が入ることで、ダイモーンであり「愛知者（哲学者）」としてのエロースが誕生した過程を子細に考察している。彼女は、ソフィストへの対抗として発展を遂げたプラトン哲学が、その誕生の時から $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ を分け持っており、その点でソフィストと同じ性質を有しているものの、知を愛するという姿勢の点で決定的に異なる存在であるとしている。

Kofman によるエロースの分析は、プラトン哲学の本質を考察する上で大変示唆に富んでいる。一方で、彼女の研究では $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ の概念の歴史性にほとんど言及がない。本稿の第2節で論じたように、 $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ にはホメロス以来の伝統があることから、本稿は Kofman の研究において言及されていないホメロスにおける $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ の意味に目を向けてみたい。知的原動力としての $\mu\eta\tau\iota\varsigma$ と $\sigma\phi\iota\alpha$ （知）との関係性を、『饗宴』でのエロース誕生神話を通して改めて考察してみたい。

『饗宴』203B-E において、巫女ディオティマがソクラテスに対しエロース誕生神話を語っている。その神話は以下の内容で始まっている。

ὅτε γὰρ ἐγένετο ἡ Ἀφροδίτη, ἡσιῶντο οἱ θεοὶ οἳ τε ἄλλοι καὶ ὁ τῆς Μήτιδος υἱὸς Πόρος. ἐπειδὴ δὲ ἐδείπνησαν, προσαιτήσουσα οἶον δὴ εὐωχίας οὔσης ἀφίκετο ἡ Πενία, καὶ ἦν περὶ τὰς θύρας. ὁ οὖν Πόρος μεθυσθεὶς τοῦ νέκταρος – οἶνος γὰρ οὐπω ἦν – εἰς τὸν τοῦ Διὸς κῆπον εἰσελθὼν βεβαρημένος ἤδδεν. ἡ οὖν Πενία ἐπιβουλεύουσα διὰ τὴν αὐτῆς ἀπορίαν παιδίον ποιήσασθαι ἐκ τοῦ Πόρου, κατακλίνεται τε παρ' αὐτῷ καὶ ἐκύησε τὸν Ἔρωτα. (Symp. 203B-C)

アプロディテが誕生した時、神々は祝いの宴を催し、そこには他の神々と一緒にメーティス女神の息子ポロスもいました。そして食事が終わった後、宴の時にはよくあるようにペニアが物乞いをしようとやって来て、戸口の近くにいました。その後、ポロスはネクタル

に酔って一というのも葡萄酒はまだなかったのですーゼウスの園へと入って行き、酔い潰れて眠り込んでしまったのです。そこでペニアは、自身の困窮のためにポロスから子をもうけようと且論み、ポロスの傍で横になってエロースを身ごもったのです。

以上のように、『饗宴』ではエロースの両親がポロス（英：Resource）とペニア（英：Poverty）であり⁽¹⁶⁾、さらに父ポロスの母親がメーティス女神という設定になっている。この神話にはプラトンによる創作の要素も多分に含まれていると考えられる。しかし、古典ギリシア語で「困難な状況を切り抜ける才覚」を意味するポロス（πόρος）の母親として、メーティス女神の名を挙げていることから、プラトンがホメロスやヘシオドスの伝統を受け継いでいることは明らかであろう⁽¹⁷⁾。

また、このディオティマによる語りよりも前に披露されている、参加者の一人パイドロスによるエロース誕生神話には次のような一文が含まれている。

πρώτιστον μὲν Ἔρωτα θεῶν μητίσατο πάντων. (Symp. 178B)

あらゆる神々の中で、一番初めに、エロースを工夫して創り上げた。⁽¹⁸⁾

ここで下線を引いたギリシア語の動詞は μητίομαι のアオリスト形であり、μητις と関連のある語である。上記の引用の直前の箇所、この内容はパルメニデスが語ったとされており、ここからもプラトンが、エロースは誕生の時から μητις と関係があることを先人から伝え聞いていたと推測できる。そこで、まず次節でエロースとその祖先であるメーティス女神、父ポロス、母ペニアとの関係を考察してみよう。

4. 愛知者エロースの祖先としてのメーティス女神

『饗宴』でのエロース誕生神話において、エロースは「神」と「死すべき者」との「中間」にありダイモーンとされる (Symp. 202E)。さらに、その後の箇所で「知恵ある者たち (οἱ σοφοί)」と「無知なる者たち (οἱ ἀμαθεῖς)」との「中間」の存在であるともされている (Symp. 204B)。

ディオティマの説明では、エロースの父ポロスは「σοφός で方策に富んでおり」、そして母ペニアは「σοφός でなく困窮している」とされている。そのため両者から生まれたエロースは「知者」と「無知者」との両方の性質を受け継いでいるということになっている。しかし、エロース誕生神話を注意深く読むと、構図はディオティマの説明ほどには単純でないことが分かる。

まず、母ペニアが「困窮している」のはその通りであろう。しかし、「σοφός でない」という点に関しては額面通り受け取ることはできない。古典ギリシア語の πενία が「困窮」を意味するため、そこからの派生で「知恵の点で貧しい」といった解釈も可能であろうが、実際にはこの神話では、母ペニアはポロスの子供を身ごもろうとして神々の宴会に巧みに忍び込んでいる。

その箇所では、前節でも紹介したように次の記述がある。「そこでペニアは自身の『困窮さ

(ἀπορίαν)』のためにポロスから子をもうけようと『目論み (ἐπιβουλεύουσα)』(Symp. 203B)とあり、ペニアは「目論む (ἐπιβουλεύειν)」ことをしているのである。そして、ペニアの「策略」は実際に成功しエロースを身ごもることとなった。こうした点を考慮に入れると、この神話においてペニアが完全に「知恵のない」存在として描かれているとは言い切れないであろう。ペニアは少なくとも、困窮状態を克服しようとある種的能力を働かせることはできるのである。ただし、ペニアのこうした能力は常に働いているわけではなく、「身ごもる」といった本質的な欲求が契機となって発揮する力なのである。

以下の引用のように、ペニアの「困窮」は ἀπορία とそれに関連するギリシア語で表されている。この点から、ペニアが経済的な意味での困窮にあるだけではないことが理解できる⁽¹⁹⁾。

πατὴρ μὲν γὰρ σοφοῦ ἐστὶ καὶ εὐπόρου, μητὴρ δὲ οὐ σοφῆς καὶ ἀπόρου. (Symp. 204B)

なぜなら、エロースは σοφός で、方策に富んでいる父の息子であるが、他方では σοφός ではなく、困窮して行き詰っている母の息子でもあるのです。

ペニアはポロスのような σοφός な存在ではないものの、自身がアポリアにあることを感じてはいる。ペニアがそのように感じているということは、ペニアはアポリアから脱した状態を本能的にはあれ知っているということにもなろう。実際にペニアはアポリアから抜け出そうとポロスから子をもうけている。ペニアが完全な「無知者」であるとは言い切れないのである⁽²⁰⁾。

以上のように、この神話においてペニアを全くの「無知者」と捉える必要はなく、ペニアはアポリアから脱しようとする種的能力を発揮することはできるのである。先の 204B の引用からは、父ポロスが、「知 (σοφία)」を持っており、またメーティス女神より受け継いだ μητις によって巧みにアポリアを克服しエウポリア (解決策) へと至る能力を持っていることが分かる⁽²¹⁾。そして、母ペニアは自身がアポリアに陥っていることを感じることができ、そのアポリアを克服しようと時には策を練って力を尽くすことができる。

本節で確認したように、ポロスの知は μητις の要素を含む σοφία である。また、次節で論じるようにそれは多様な知を包含しつつ、同時に「真の知」と呼ぶにふさわしい面を持っている。そして、ペニアの場合は σοφός な存在ではないものの、ペニアはアポリアにあることを感じる能力は持っている。このような両親から誕生したエロースは、メーティス女神と父ポロスから受け継いだ σοφία に部分的には与っているものの、母ペニアから受け継いだ「アポリア」によって完全には σοφία に達することができない。ペニアは、息子であり愛知者であるエロースにとっての、「欠乏の原理」となっており、アポリアから抜け出ようという欲求を彼に生み出しているのである。

『饗宴』では、エロースは母ペニアの性質を受け継いでいつも裸足で過ごしているとされている。これは、『饗宴』の後半でアルキビアデスが語る、金銭にも身なりにも無頓着なソクラテスの姿を連想させる。そして、プラトンが描くソクラテスは、ペニアのように「行き詰まり」、

しばしば対話相手をアポリアへと引き込む。『メノン』80C-D では、ソクラテス自身が：「道を見うしなっているのは (ἀπορῶν)、まず誰よりもぼく自身であり、そのためにひいては、他人をも困難に行きづまらせる (ἀπορεῖν) 結果となるのだ。」⁽²²⁾と告白している。

そして、ソクラテスのこうした姿勢には、時に相手をわざと困惑させる「策略 (μῆτις)」としての側面も見出し得るのではないか⁽²³⁾。そうであれば、愛知者ソクラテスはポロスの μῆτις 的「知」を持っており、プラトンの描くソクラテスも捉え方によっては、真理の探究のために μῆτις を用いているのである。

概念としてのエロースとは、本来的に「美 (καλός) なるもの」によって掻き立てられ、それを追い求める欲求である⁽²⁴⁾。『饗宴』では、ディオティマによって「σοφία は最も美しい (κάλλιστος) ものの一つ」(204B) とされることにより、ダイモーンであるエロースが σοφία を追い求める存在となっている⁽²⁵⁾。それ故、エロースは σοφία を求める「愛知者」なのである。その後、ディオティマとソクラテスとの問答が続き、204E において「美しい (καλός) もの」に替えて「善き (ἀγαθός) もの」が持ち出され、最終的に 206A において「エロースが目的とするのは、善きものが永遠に自分のものとなること」という点が同意される⁽²⁶⁾。

ディオティマは、206A で同意されたエロースの目的に関して、それを達成するための手段として「美しいものにおける出産と誕生」(206E) を挙げる。出産とは、自分に代わって別の新しいものを後に残す行為である。ディオティマは出産の行為を「不死性」との関連で強調する。神以外の死すべきものたちも、この出産を通して不完全ではあるが不死性に与ることができる。この不死性を通じて、「善きもの」を永遠に自分のものとするエロースの本質に近づくことができるのである。

ディオティマの語るエロースの特質とは以上の通りであるが、本稿はエロースが「出産」と深く関わっている点に着目したい。母ペニアは困窮のゆえにポロスと交わりエロースを身ごもったとされているが、それは単に経済的な困窮だけではなく、「美しいもの」に対する困窮、言い換えれば「美しいもの」に対する欲求という側面もあるはずである。なぜならば、ペニアは「美」を欠いた存在であり、そして σοφία が「美しい (καλός) もの」であれば、σοφία を持つポロス自体にも「美しい (καλός)」面があるはずだからである。ペニアは「美しい」面を持つポロスに恋をし、「美しいもの」における出産を本能的に欲したのだと考えられる。

母ペニアのこうした性質がエロースにも受け継がれているため、エロースは「美しいもの」における出産を欲するようになったのであろう。知の点だけでなく、「善きもの」全体を通して欠乏し、それらを欲しているエロースは、あらゆる点で欠くもののない「神」に少しでも近づくために出産によって「不死性」を得ようとする。このような点でも、母ペニアは愛知者エロースにとっての「欠乏の原理」となっているのである。しかし、ここでの欠乏とは最終的に「善きもの」を目指す「幸福 (εὐδαίμων)」への道なのであり、否定的なものではない。

また、エロースは父ポロスより σοφία を不完全ではあるが受け継いでいる。そして、エロー

スが父ポロスから受け継いだ σοφία とは、ポロスの母メーティス女神が有していた μῆτις の要素を含むものである。ディオティマはエロースについて以下のように述べている。

τὸ μὲν κεφάλαιόν ἐστι πᾶσα ἡ τῶν ἀγαθῶν ἐπιθυμία καὶ τοῦ εὐδαιμονεῖν ὁ μέγιστός τε καὶ δολερός ἔρως παντί· (Symp. 205D)

要するに、善き物事へのそして幸福であることへのあらゆる欲求は、誰にとっても、あの最大にして δόλος に満ちた恋（エロース）のことなのです。

上記の引用でエロースを修飾している δολερός という形容詞は、通常「騙しに満ちた (deceitful)」を意味する。そして、この語は形から分かる通り δόλος (騙し) と同じ系統に属している。それ故、このディオティマの話からも、エロースは「策略」といった μῆτις の要素を祖先から受け継いでいると解釈できる。

それでは、ディオティマの言う「δόλος に満ちた」エロースとは、いったいどのような意味であろうか。この点には、後の箇所ではディオティマが説明しているように (210A)、エロースによって駆り立てられる行為には動詞 μυεῖν (秘儀に与る) が関連付けられており、秘儀と同様に一定の作法が存在すると示されている点が参考になるであろう⁽²⁷⁾。ディオティマは、エロースによって駆り立てられる行為と秘儀との関連について言及した直後に、「もし人が 正しく 追い求めるのなら (ἐάν τις ὀρθῶς μετίη) (210A) と条件を付けて、この「秘儀」を説明していく。ここでの説明には、エロースの追求に関しては、秘儀のように正しい作法で臨まなければ道を誤る可能性が暗示されている。エロースは、エロースを追求する者たちを時に巧みに誘惑し、彼らが、追い求めている「美」に溺れ誤った方向へと墮落していかないかどうかを試し、エロースを追求する資格を判断しているのである。

プラトンが対話篇で描くソクラテスをエロースと重ね合わせるならば、まさにアルキビアデスなどはソクラテスの持つ「知」の美しさに魅了され、それに溺れてしまったのではないだろうか。『饗宴』でも、ソクラテスがディオティマの話を伝え終わった直後にアルキビアデスが登場する。こうした設定も、プラトンが意図して練り上げたものであろう。実際のソクラテスとアルキビアデスとの関係には、エロースの本質が暗示されているかのようである。

以上考察してきたように、『饗宴』でのエロースはダイモーンであり「愛知者 (哲学者)」として描かれており、エロースにおいて初めてポロスのメーティス女神由来の μῆτις と、ペニアによる「欠乏の原理」が結びついたと考えられる。機略縦横なポロスはメーティス女神の子孫であるためソフィストと似た面を持つ。このポロスとペニアが一緒になって初めて愛知者が誕生した。この点には、実際にソフィストの存在を背景として、ソクラテスのような愛知者が誕生したことと類似点が多い。以上の点を考慮に入れば、μῆτις 的な「知」も哲学の営みには必要なのである。『饗宴』でのエロース誕生神話を手掛かりとすれば、確かにプラトン哲学の中でも μῆτις が一定の役割を果たしていると言えることができるであろう。次節では、プラトン哲

学における σοφία と μῆτις との関わりをより詳しく考察してみたい。

5. プラトン哲学での μῆτις と σοφία との関わり

プラトンが著した対話篇の中でも、最初期のものと位置付けられる『弁明』では、ソクラテスが σοφία について以下のように語っている。

τὸ δὲ κινδυνεύει, ὃ ἄνδρες, τῷ ὄντι ὁ θεὸς σοφὸς εἶναι, καὶ ἐν τῷ χρησμῷ τούτῳ τοῦτο λέγειν, ὅτι ἡ ἀνθρωπίνη σοφία ὀλίγου τινὸς ἀξία ἐστὶν καὶ οὐδενός. (Ap. 23A)

しかし、恐らくは、諸君よ、実際は神が真に σοφός なる者であり、この神託の中でも神は次のことを言おうとしているのかもしれない。すなわち、人間の知恵というものは何か僅かな価値しかないものか、あるいは全く価値のないものだ。

『弁明』でのソクラテスの発言には、どの程度プラトン自身の思想が反映されているのかという問題もあるが、少なくとも「知」には様々なレベルのものがあり、「真の知」といった神だけが持つことのできるような最高位の知には、人間は容易には到達できないとプラトン自身も考えていたはずである。プラトン哲学においては、「知」を表す言葉として σοφία 以外にも ἐπιστήμη、φρόνησις などの語が使用されているが、以下では、上に引用した『弁明』でのソクラテスの発言に重点を置いて σοφία の言葉が意味し得る多様な知の形態の中でも、「真の知」としての側面に着目したい⁽²⁸⁾。ただし、古典テキスト全体を見渡すと σοφία の語が「真の知」という意味で用いられたケースは多いわけではない。

前5世紀以前における σοφία や、それを持つ者を意味する σοφιστής の語の意味の多義性に関しては、現在までに様々な研究がなされてきた⁽²⁹⁾。σοφία の語は最古の文献であるホメロスにおいて既に使用されている。ホメロスでは、第2節で検討したような μῆτις をはじめとして、他にも τέχνη などのいくつかの「知」が登場するが、そもそも σοφία の語はホメロスの作品全体を通して1回しか使用されていないのである⁽³⁰⁾。該当箇所は以下の通りである。

ἀλλ' ὥς τε στάθμη δόρυ νήϊον ἐξιθύνει | τέκτονος ἐν παλάμῃσι δαήμονος, ὅς ῥά τε πάσης | εὖ
εἰδῇ σοφίης ὑποθημοσύνησιν Ἀθήνης, | ὥς μὲν τῶν ἐπὶ ἴσα μάχῃ τέτατο πτόλεμός τε· (Il. 15. 410-13)

それはまるで、アテナ女神の教えによってあらゆる σοφία に精通した、熟練の船大工が手にした墨縄が船材を真っ直ぐにするように、両軍の戦況はその糸のように互角のまま張り詰めていた。

上記の箇所からは、σοφία がアテナ女神より人間に授けられたものであり、人間でも到達可能な程度の σοφία であることが理解できる。このように、ホメロスでの σοφία は船大工が身に着け得るものであり、主に「技術」といった実践的な知を意味する文脈で使用されている。

ホメロスでのこの σοφία の使用例を踏まえると、やはり σοφία の語は「技術」をも含み得る言葉であり、純粹に觀想的な概念ではなかったことが理解できる。ホメロスにあっては、むしろ μῆτις の方がゼウスなどの神々や英雄たちと深く結びついているため、より「真の知」に近い地位を占めていたと言えるかもしれない。

翻って、『饗宴』における σοφία は「真の知」を意味し得るものであった。そして、本稿第3節・4節で検討したように、『饗宴』でのメーティス女神は、この σοφία を愛し求める愛知者エロースの祖先である。プラトンがエロースの祖先としてメーティス女神に言及しているのは、ホメロス、ヘシオドスなどで描かれる μῆτις の伝統をプラトンが受け継いでいるためである。そして、プラトンは自身が確立しようとする、愛知の営みとしての哲学を確かなものとするために、μῆτις の持つ「巧みさ」を重視し、μῆτις を愛知者エロースの中へと組み込んだのである。

『饗宴』でのディオティマの話の中では、エロースはダイモーンであり「愛知者」であるため、「真の知」に達することはない。エロースにできることは「アポリア」を乗り越える方法、すなわち「エウポリア（解決策）」を見つけ出すことである。このことは、以下の箇所で説明されている。

ἀλλὰ τοτὲ μὲν τῆς αὐτῆς ἡμέρας θάλλει τε καὶ ζῇ, ὅταν εὐπορήσῃ, τοτὲ δὲ ἀποθνήσκει, πάλιν δὲ ἀναβιώσκει διὰ τὴν τοῦ πατρὸς φύσιν, τὸ δὲ ποριζόμενον ἀεὶ ὑπεκρεῖ, ὥστε οὔτε ἀπορεῖ ἔρως ποτὲ οὔτε πλουτεῖ, σοφίας τε αὖ καὶ ἀμαθίας ἐν μέσῳ ἐστίν. (Sym. 203E)

エロースは、ある時は、同じ日のうちに方策を見つけ出し、生氣に満ちて生きることもあれば、またある時は反対に、死んでいく。ですが、彼は父の本性のために再び生き返りをするのですが、手に入れるものは常に無くなっていくのです。それだから、エロースはいかなる時も困窮することはない、また富むこともないのです。さらに、エロースは σοφία と 無知 との中間にある存在なのです。

上記の箇所からは、エロースが両親から受け継いだ資質の間にあって、母ペニアが持つ「欠乏の原理」、すなわちアポリア的な側面が、父ポロス由来の μῆτις によって、アポリアを切り抜けエウポリアへと上昇していくと解釈できる。それと同時に、母ペニアが本質的に備えるアポリアの故にエロースは知において十分に富むことが無く、そのため「美のイデア」を見て取るためには永遠に「真の知」を求め続けなければならない⁽³¹⁾。

本稿第2節でホメロスにおける μῆτις を検討した際には、その「狡知・策略」の側面を中心に考察した。この点が μῆτις の最大の特徴であることは疑いえないであろう。さらに、以下ではプラトン哲学における μῆτις と σοφία との関わりという観点から、「狡知・策略」の側面の背後にある μῆτις の一つの本質的な特徴を示してみたい。

確かにホメロスにおいて、μῆτις が単なる「狡知・策略」の知として働く場面はあろう。しかし、オデュッセウスの場合に顕著であるが、彼が持ち前の μῆτις を発揮する場面は彼が苦境に

立たされた時である。第2節で引用した『オデュッセイア』第13巻のアテナ女神の台詞は、オデュッセウスが故国イタケに10年の漂泊を経て帰り着いたにもかかわらず、いまだに警戒して作り話をやめようとしめない態度にアテナが微笑ましさを感じ、その粘り強さを評したものである。オデュッセウスが自身の *μητις* を駆使して、このような「策略」としての作り話をやめない理由は何といっても無事に故国へと帰り着くためである。

このように、オデュッセウスが *μητις* を駆使する背景には、「帰還」という大きな目的が存在する。*μητις* は「狡知・策略」という現れ方をもって働くが、その本質は単に相手を「騙す」ことにあるのではなく、相手を騙してでも目的を達成しようとする知的な「原動力」にある。神と異なり人間はあらゆる能力において限界がある。そのため、少しでもより完全な形で能力を発揮するために、オデュッセウスは *μητις* を駆使して目的を遂げようと粘り強く力を尽くす⁽³²⁾。

同様に、『饗宴』でのエロースは、母ペニアから受け継いだ「欠乏の原理」による飽くなき探求の資質が、父ポロスから受け継いだ *μητις* によって粘り強く働き続ける。その結果、エロースは、この上なく美しい「真の知」なる *σοφία* を愛し求めることをやめないのである。

愛知者エロースが「知者」と「無知者」との中間的存在であり、*σοφία* を追い求める存在であり続けるのには、一つは母ペニア由来の「欠乏の原理」を契機とした、「美しいもの」としての *σοφία* において出産を欲するという欲求が関わっている。そして、エロースが「真の知」としての *σοφία* を求め続けることができるのは、探究の原動力としての *μητις* が関わっているからなのである。エロースは父ポロスから完全ではない *σοφία* を受け継ぐと同時に、完全な *σοφία* を求め続けるための、目的達成の資質としての *μητις* を同時に受け継いでいるのである。

『饗宴』でのエロース誕生神話においては、「真の知」に人間が近づくための必須なる資質として *μητις* が位置付けられていると考えることができる。この点から、人間の営みとしての *φιλοσοφία* (哲学) にとって *σοφία* と *μητις* とは完全に一体となっておらず、要素同士で相互補完的な関係にあると言えよう。

6. おわりに

Detienne & Vernant は、プラトンが「かん」や推量的な「知」によって働く「技術」、「才覚」を「哲学的エピステーメー」の観点から断罪したと主張していた。確かに、*μητις* はプラトンがこうした文脈で批判的に論じている「知」の一つに該当しよう。

しかし、本稿で確認したようにホメロス、ヘシオドスが描く *μητις* は、プラトン哲学の中に確かに組み込まれている。プラトン哲学は *μητις* を排除したのではなく、その知を哲学の営みの中に組み込み、その営みの背後で *μητις* は力を及ぼしているのである。『饗宴』でのエロース誕生神話を手掛かりとすると、*φιλοσοφία* (哲学) に備わる「真の知」を愛し求めようとする営みには、困難を切り抜け、目的を遂げようとする知的原動力たる *μητις* という要素も必要とさ

れたことが理解できる。

プラトンの著作の多くは、φιλόσοφος（哲学者）の立場からソフィストに対する批判として書かれたと考えられる。σοφιστής（ソフィスト）は文字通り σοφία を持ち、教授することができる」と公言していた者たちである。しかし、哲学者とソフィストとが全くの別物であるというわけではない。少なくともプラトン哲学は、σοφία を人間には容易に到達できないものとしている点でソフィストと異なるが、その σοφία に至る過程では、ソフィスト同様にプラトン哲学も μῆτις を用いている。

これは、ギリシア神話でゼウスがメーティス女神を飲み込んだように、プラトン哲学もメーティス女神を「飲み込んだ」と言えるかもしれない。こうすることで、より確実に「真の知」としての σοφία へと近づくことができるとプラトンは考えたのではないだろうか。もしそうだとすれば、こうしたプラトンの戦略の中に巧みな μῆτις の側面を看取することができる。プラトンは、まさに φιλοσοφία という営みの中に μῆτις を組み込んだのである。

注

- (1) 本稿で「知」という表現を用いる場合、特に断りのない限り、σοφία、μῆτις、ἐπιστήμη といった古典ギリシア語で知と関わりのある言葉を一まとめにして「知」と表現している。
- (2) 希語のカタカナ表記の音引きに関しては、読みやすさを考慮して基本的にこれを省略することとした。ただし、「エロース」など一部のものは筆者の判断で音引きを加えている。
- (3) この点に関しては、Bracke (2019), 227-35.を参照のこと。なお、*The Cambridge Greek Lexicon* (2021)では、1. skill, cleverness, shrewdness, 2. thoughts, counsel, planning, advice, 3. scheme, design, plan, 4. Metis と訳語があてられており、cunning はないものの LSJ⁹よりは「狡知・策略」の意味合いが強くなっている。
- (4) Detienne and Vernant (1978), 3.
- (5) Detienne and Vernant (1978), 3-5.
- (6) Detienne and Vernant (1978), 315-16. プラトンによる、純粋度を基準とした技術・知識内部の序列については『ピレボス』55D、61D-62D を参照のこと。
- (7) Kofman (1988), 8-9.
- (8) ヘシオドス「神統記」、147 頁。作品名の略記は *The Oxford Classical Dictionary*, 3rd edn, (1996)にならう。また、希語原文を載せていない原典からの引用に関しては、既存の翻訳を使用している。ただし（）を使用し適宜内容を補っている箇所がある。以下同。
- (9) Detienne and Vernant (1978), 5-6, 20.
- (10) Pind. *Ol.* 1.9, *Nem.* 3.9. 詳しくは Bracke (2019), 243, n62. を見よ。
- (11) クセノパネスによる以下の断片がある：「ホメロスとヘシオドスは人の世で破廉恥とされ非難的とされるあらんかぎりのことを神々に行かせた一盗むこと、姦通すること、互いのだまし合うこと。」(DK 21B11) (内山(他訳)『ソクラテス以前哲学者断片集』、272-73 頁)。
- (12) プラトン『国家（上）』、158 頁。
- (13) TLG を用いて、前 8 世紀から 4 世紀の著作を対象に μῆτις の語の主要な単数変化形のみを検索すると、全部で 66 件該当があった。その 66 件のうち半数の 33 件がホメロスの作品中という結果になっている。
- (14) Kofman (1988), 8.
- (15) Helmer (2012), 111-112, esp. 111, n4.

- (16) ポロスとペニアの英訳については、Dover (1980), 141-42. に従った。
- (17) この点に関しては本稿第2節、特にヘシオドス (*Theog.* 886-90)、ホメロス (*Od.* 13. 293-99, *Il.* 23. 313-18) からの引用も参照のこと。
- (18) Dover (1980), 91., Rowe (1998), 137. この一文は、主語が明示されておらず不明とされる。
- (19) Dover (1980), 142., Strauss (2001), 194-95. アリストパネス『ブルートス』にもペニア女神が登場し、プラトンがこのペニアを参考に行っている可能性が指摘されている。アリストパネスの描くペニアには、金銭に頓着しない「清貧」といった特徴が見出せる。
- (20) Strauss (2001), 194. Strauss も、ペニアが現状に満足していなかったからこそポロスと交わったのであり、現状に満足しないという点でペニアは無知者ではないと解釈している。
- (21) Rowe (1998), 177. Rowe は、動詞 *εὐπορεῖν* の対義語は *ἀπορεῖν* であり、203D7-E5 の描写を哲学的討論の比喻であると解している。本稿で引用した 204B6-7 にある *εὐπορος* と *ἄπορος* にも同様な側面があると解釈したい。
- (22) プラトン『メノン』、44 頁。
- (23) Nightingale (2000), 172. Nightingale もソクラテスと *μητις* との関係性を指摘している。
- (24) 『饗宴』201E などではソクラテスはそのように語っている。また、『パイドロス』250E にも同様の記述が見られる。
- (25) Dover (1980), 2, 143. Dover によれば古典ギリシア語の *καλός* とは、単に「美しい」という意味を表すだけでなく、「好ましい」対象全般への反応を表し得る範囲の広い概念である。
- (26) Dover (1980), 136. 『饗宴』204E1-2 では、*καλός* なるものと *ἀγαθός* なるものが同列に扱われている。少なくとも『饗宴』でのディオティマの話においては、両者に本質的な区別は付けられていないと考えられる。
- (27) Dover (1980), 155., Rowe (1998), 194. 両者はこの箇所を「エレウシスの秘儀」と関連付けて解釈している。
- (28) Vlastos (1985), 2, n4. Vlastos は『弁明』で使用されている「知」を表す言葉 *σοφία*、*ἐπιστήμη* などとはすべて同等の意味を持ち、交換可能であるという立場を取っている。しかし、Leshner (1987), (282, n10.) は Vlastos の見解に反論し、『弁明』19C6 において、特定の *ἐπιστήμη* を持つ人物が *σοφός* であるとされている点だけで、両者を交換可能とみなすのは *σοφία*/*σοφός* の言葉が持つ歴史性を無視していると指摘している。Leshner は、*σοφία* の言葉が歴史的に見て「特殊技術」や「専門知識」、「ある領域における卓越性」といった意味を有していた点を指摘しているのである。本稿では Leshner の見解を受け入れ、『弁明』で使われる *σοφία* には「神の知」としての知だけでなく、職人や専門家などが持つ「技術知」、「専門知」も含む前5世紀以前の意味が色濃く残っていると考える。それ故、少なくとも『弁明』においては *σοφία* の語を解釈する際、文脈に沿ってその意味を判断する必要がある。また、Stokes (1997), (21.) は、『弁明』での *σοφία* に三つの区分を設けている。一つは、技術知など「一般人の知」であって実際には価値があるとは言えないもの、二つ目は「ソクラテス的知」であり僅かには価値のあるもの、最後が「神の知」であり大いに価値のあるものとされる。本稿では『弁明』での *σοφία* には様々な価値のものがあるという見解を参考とした。
- (29) *σοφία* に関しては、Dover (1980), 82. 174C7 の解説を見よ。*σοφιστής* については拙論（『人文学フォーラム』第6号、名古屋大学人文学研究科、341-56 頁所収）を参照されたい。
- (30) Bollack (1968), 551. 形容詞形 *σοφός* の使用例は一例も存在しない。
- (31) Rowe (1998), 198. 『饗宴』には、直接「美のイデア」と訳し得るギリシア語表現は存在しない。「美のイデア」に関しては、210E にあるように「本性において驚嘆すべき美 (*τι θαυμαστόν τὴν φύσιν καλόν*)」などと「美そのもの」を示す表現が用いられている。そして、これは 210A でディオティマによって、「ソクラテスであっても見て取ることができるかどうか分からない」と言われている。
- (32) Silva (2020), 84-85, n8. オデュッセウスは「知力」だけでなく「忍耐力」も備えた英雄であると解釈できる。実際に *Il.* 8. 97 や *Od.* 5. 171 など複数個所で、オデュッセウスに対し *πολύτλας* (高い忍耐力) という名詞が彼のエピソードとして使用されている。

古典テキスト・主要参考文献

- Allen, T. W. and Monro, D. B. (eds.), (1920), *Homeri Opera: Tomus II*, 3rd edn (Oxford: Clarendon Press).
- Allen, T. W. (ed.), (1919), *Homeri Opera: Tomus IV*, 2nd edn (Oxford: Clarendon Press).
- Burnet, J. (ed.), (1900), *Platonis Opera: Tomus I* (Oxford: Clarendon Press).
- Burnet, J. (ed.), (1901), *Platonis Opera: Tomus II* (Oxford: Clarendon Press).
- Bollack, J., (1968), 'Une Histoire de σοφία', in *Revue des Études Grecques*, Tome 81, 550-54.
- Bracke, E., (2019), 'Between Cunning and Chaos: μῆτις', in C. Stray, M. Clarke and J. T. Katz (eds.), *Liddell and Scott: The History, Methodology, and Languages of the World's Leading Lexicon of Ancient Greek* (Oxford: Oxford University Press), 226-44.
- Detienne, M., and Vernant, J. - P., (1974), *Les Ruses de l'intelligence: La mètis des Grecs* (Paris: Flammarion).
- Detienne, M., and Vernant, J. - P., (1978), *Cunning Intelligence in Greek Culture and Society*, J. Lloyd (trans.), (Chicago: The University of Chicago Press).
- Diggle, J. and others (eds.), (2021), *The Cambridge Greek Lexicon*, Vol. 2 (Cambridge: Cambridge University Press).
- Dover, K. J. (ed.), (1980), *Plato: Symposium* (Cambridge: Cambridge University Press).
- Helmer, É., (2012), 'Platón, Filósofo de la Mètis', in *Diálogos*, No. 93, 109-18.
- Kofman, S., (1988), 'Beyond Aporia?', D. Macey (trans.), in A. Benjamin (ed.), *Post-Structuralist Classics* (New York: Routledge), 7-44.
- Leshner, J. H., (1987), 'Socrates' Disavowal of Knowledge', in *Journal of the History of Philosophy*, Vol. 25/2, 275-88.
- Liddell, H. G., Scott, R., Jones, H. S. (eds.), (1940), *A Greek-English Lexicon*⁹ (Oxford: Clarendon Press).
- Naas, M., (2008), 'Fire Walls: Sarah Kofman's Pyrotechnics', in T. Chanter and P. DeArmitt (eds.), *Sarah Kofman's Corpus* (New York: State University of New York Press), 49-74.
- Nagy, G., (1979), *The Best of the Achaeans: Concepts of the Hero in Archaic Greek Poetry* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press).
- Nightingale, A. W., (2000), 'Sages, Sophists, and Philosophers: Greek Wisdom Literature', in O. Taplin (ed.), *Literature in the Greek and Roman Worlds: A New Perspective* (Oxford: Oxford University Press), 156-91.
- Raphals, L., (1992), *Knowing Words: Wisdom and Cunning in the Classical Traditions of China and Greece* (New York: Cornell University Press).
- Rowe, C. J. (ed.), (1998), *Plato: Symposium* (Warminster: Aris & Phillips).
- Silva, T., (2020), 'La Astucia en la Conceptualización Platónica de σοφία', in *Nova Tellus*, Vol. 38/1, 79-99.
- Stokes, M. C. (ed.), (1997), *Plato: Apology* (Warminster: Aris & Phillips).
- Strauss, L., (2001), *On Plato's Symposium*, S. Benardete (ed.), (Chicago: The University of Chicago Press).
- Vlastos, G., (1985), 'Socrates' Disavowal of Knowledge', in *The Philosophical Quarterly*, Vol. 35/138, 1-31.
- 内山勝利（他訳）、（1996年）『ソクラテス以前哲学者断片集 第I分冊』、岩波書店。
- プラトーン（1968年）「ソークラテースの弁明」『ソークラテースの弁明・クリトーン・パイドン』田中美知太郎（他訳）、新潮文庫。
- プラトーン（2007年）『饗宴』『饗宴／パイドン』朴一功（訳）、京都大学学術出版会。
- プラトーン（2016年）『饗宴一訳と詳解』山本巍（訳）、東京大学出版会。
- プラトーン（1979年）『国家（上）』藤沢令夫（訳）、岩波文庫。
- プラトーン（1994年）『メノン』藤沢令夫（訳）、岩波文庫。
- ヘシオドス（2013年）『神統記』『全作品』中務哲郎（訳）、京都大学学術出版会。
- ホメロス（1992年）『イリアス（上）（下）』松平千秋（訳）、岩波文庫。
- ホメロス（1994年）『オデュッセイア（上）（下）』松平千秋（訳）、岩波文庫。